

# 城下町・熊本の街区要素の一考察

久保 由美子

熊本市都市政策研究所 研究員

キーワード：熊本城、城下町、勢屯、寺院、防衛

## 1. はじめに

建築史家の内藤昌が日本の城下町<sup>1)</sup>について記述した中に掲載した都市絵図復元計測データによると、熊本は総面積規模にして全国第6位、九州では第1位の規模を誇る大城下町であった<sup>2)</sup>。明治以後も、西南戦争と第二次世界大戦の2度にわたる戦災や度重なる水害などの自然災害に見舞われてきた。そして城下町時代の名残が、車両のスムーズな通行を許さないクランク状の道路や狭い路地などとして、まちなかのあちこちで見かけられる。このような特徴を「不便」の一言で片付けるのは簡単であるが、脱車社会やコンパクトシティ化が叫ばれる昨今のまちづくりの中では、長所とみる発想の転換も必要なのではないだろうか。その意味で、「城下町とは何か」、「城下町・熊本」とは何か」を検討することは、熊本市のまちづくりの独自性を探る上で、また市民のアイデンティティ醸成にとって意義があると考える。本研究は、以上のような発想に基づいて、城下町・熊本の個性を形作る諸要素の抽出を試みたものである。

## 2. 熊本城とその城下の構造 — 「城」と「城下町」

そもそも都市には、統治者や都市計画家、そしてそこに住まう人々のアイデア、すなわち都市の担い手たちの造形・造景思想を形成する理念が内在している。これを近世史研究者の吉田伸之は、「なんらかのアイデア（＝理念〔筆者注〕）によって、意識的に造形された空間構造をそこに見出しうるならば、それを都市と呼びうる」<sup>3)</sup>と表現している。そして時代の流れとともに、都市の担い手とその理念も変化し、その都市の個性を形成してゆくのである。それでは、城下町・熊本を形成する理念とはどのようなものであったのだろうか。これを検討する前提として、まず城下町という都市形態について先学の知見を元に整理してみたい。

内藤昌は、「シロ」とはもともと「場所」を意味し、日本の

都市の原型だとしている<sup>4)</sup>。これに「民を盛る」を意味する中国文字「城」をあてたのであり、「城は住民を守る社会基盤としての宗教・政治・経済の三大機能を活かす権力が具体的に求めた都市施設」<sup>5)</sup>と考えることができる。城下町とは、このような性格を持つ城を核として、中世末から近世期にかけて日本各地で発達した都市形態である。城下町は、長安や平安京のような条坊制の都市をモデルとしつつ、各地の自然的・地理的条件に合わせて町割（＝都市計画）が施された。城郭を核に町が展開するという共通点から出発しつつ、それぞれの地で個性豊かな城下町都市が—いわば京の都をデフォルメする形で—建設され、領国の政治・経済・社会の中心地として成長していったのである。

城下町の特質を考えるうえで、忘れてはならないもうひとつの要素は「要塞都市」としての側面である。城下町は、戦国乱世の世を生きる武将たちによって有事、すなわち合戦への備えを最優先に造られた都市であった。基盤目を基調とした直線の道並を象徴とする「都」的構造と、敵の見通しをさえぎるべく意識的に食い違い状にされた辻等の「要塞」の2つの側面は、世界の都市史的にみても他に例を見ない、城下町のユニークな特性であるといえる。江戸時代を通じて、日本全土に計画された城下町のほとんどが、明治時代を経て現代都市へと成長を遂げた。そしてこの城下町としての出自が近代以降の都市計画に様々な影響を与えていったのである。

## 3. 城下町・熊本の地理的構造

全国の城下町を幅広く研究している佐藤滋<sup>6)</sup>は、熊本を、その地理的構造から、白川・坪井川の二本の河川を軸とした「馬の背状の台地」の地形の上に成立した「異形の城下町」と呼んでいる。これらの地理的条件によって、熊本は他の城下町には見られないユニークな都市空間を構成する

こととなった。

まず熊本では町割をする際、直角を基本とした区画形成が地理的に困難であった。また後述するように、加藤清正が城郭の位置を北東に移動させたため、町の中心軸も移動するかたちで城下町が拡大している。したがって、町全体としては、他の城下町によく見られる矩形状ではなく、不定形の町区を複雑に組みあわせる「モザイク状」の町割が施されることとなった。他方において、各町区の内部においては、矩形と格子状の道割を基調とした整然としたまちなみが整備された。

それゆえ佐藤は「熊本は全体を貫くはっきりとした骨格を持たず、ほかの城下町のような統合的な構造の説明をすることは難しい。あえていえば、城下町の東辺を区切る白川と、中心を流れる坪井川、そして熊本城の3つの要素が骨格を形づくるすべて」であり、「その大きな骨格に、それぞれ固有な構成の小規模な『まち』が割りつけられている」と述べている。「方向感覚を狂わす空間装置が町全体に仕掛けられているかのよう」な迷宮都市、それが城下町・熊本の全体像なのだという。

無論、城下町の特徴を考慮に入れると、この変化に富んだ町割には、軍事上の意味も込められていただろう。城下町・熊本の礎を築いた加藤清正は戦国有数の築城術でも知られる。当然、城下町建設に際しても、相当念入りな軍事上の考慮を施したであろう。ところが、熊本城そのものの堅固さについては世に広く知れ渡るところであるのに対し、町全体の防衛体制に関する本格的な検討はこれまでなされてこなかった。しかし要塞という特性を抜きにして城下町の本質を語ることはできない。城下町の防衛体制には、都市計画家たる築城者とその後継者たちの都市建設に対する理念がこめられているからである。したがって熊本という城下町都市に内在する理念<sup>7</sup>を論ずるうえでも、防衛体制を考察することは有意義であろう。

#### 4. 熊本城と城下町をめぐる防衛理念

一般に、城下町の防衛体制として、堀をめぐるす、町の周辺部を寺院で固める、道を食い違い状にする等の工夫が挙げられ、熊本もその例に漏れない。

熊本の特徴的な防衛体制として、しばしば言及されるのが古町地区の「一町一寺」制である(図1)。町人地の一区画の中央部分に寺院を設け、周りを町屋(民家)で囲むもので、南方の大大名である薩摩の島津氏への備えであった

とされている<sup>8</sup>。寺院は町屋よりはるかに堅固なつくりであり、また敷地も広いことから有事の際は兵營地に活用できる。古町地区に一町一寺制を敷いた最大の理由は、備えるべき南側に、守りの手薄な町人地が位置するために、その防衛性を高めようとしたためだと考えられている。

通説では、名将加藤清正が古町の一町一寺制を布陣したとみなされてきた<sup>9</sup>。ところが熊本の城下町絵図を時代順に追っていくと、一町一寺制が完成するのは細川氏の時代であり、加藤氏の時代はまだ成立していないことが分かる(図2)。では加藤時代の城下町はどのような防衛体制をとっていたのであろうか。この点について論じるために、まず城下町の核である城郭、すなわち熊本城自体をめぐる防衛体制について既往研究の見解を整理しておこう。

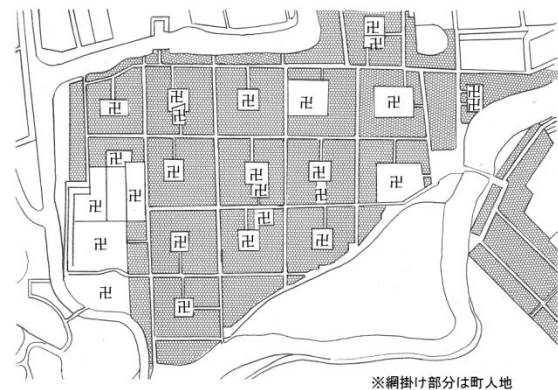


図1：古町絵図（文政二[1819]年ごろ）<sup>10</sup>

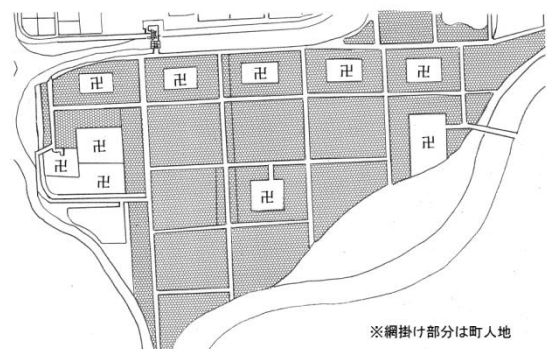


図2：古町絵図（寛永六～八[1629～31]年ごろ）<sup>11</sup>

加藤清正は、豊臣秀吉の命により、小西行長と領土を二分する形で肥後国に入国した。当初、現在の国立病院の周辺に限本城(古城)を築いたとされる(慶長四[1599]年)。その後、関が原の戦いを経て徳川家康により肥後国全土を

与えられた清正は、「隈本」を「熊本」と改め、現在の位置に新たに築城した。清正が改めて縄張りしたのは、その石高（54万石）にふさわしい城と城下町を築くためでもあるが、秀吉死後の緊迫した状況の中、対立していた石田三成が牛耳る豊臣方の攻撃に備えるためであったと考えられている<sup>12</sup>。

往時の熊本城は、大小二基の天守に加えて、三重五階建ての規模を持つ櫓を五基備えた壮大な巨城であった。熊本城の築城時期、天守・諸櫓の完成年月に関しては、旧来から様々な見解<sup>13</sup>がある。とくに唯一現存する宇土櫓に関して、小西行長の居城であった宇土城を移築したことがその名の由来と長らく伝えられてきたが、熊本城再建に携わった藤岡<sup>14</sup>等の研究により、この説は否定されている。

現在のところ、有力な見方は次の三点に整理できる：①大天守の完成時期は、慶長一二（1607）年で、当時は独立天守であった；②現在の宇土櫓は、同時期に隈本城（古城）を移築して造営されたものである；③小天守は、清正死後の慶長一七（1612）年頃に息子の忠広によって築かれ、熊本城は現在のような大小連立式の天守となった。この小天守が、旧宇土城を移築したものである。

このうち①、②について、大天守の乾の方向（北西）の宇土櫓が配置されているが、忠広の時代になると、その延長上に清正の墓を安置する本妙寺が配置されている<sup>15</sup>。宇土櫓が旧隈本城天守であったとするならば、清正自身の手による新旧二つの天守の延長線上に息子の忠広の父の菩提寺を置くのも頷ける。また③に関して、小野／北野<sup>16</sup>によれば、忠広による小天守増築は、生前の清正が隠居後の居城とすべく改修を進めていた宇土城、すなわち父の遺構が、元和一国一城令（元和元[1615]年）により破却されるのを避けるためであったという。他方で小野／北野は、小天守増築をはじめとする忠広の熊本城改修を、江戸幕府側が軍備増強の動きと受け取った可能性をも指摘している<sup>17</sup>。外様大名であった加藤氏の政治的立場を考慮すると、忠広側にもその意図があったことは十分に考えられる。

いずれにせよ、清正・忠広両代の熊本城に共通する防衛理念として、南方の仮想敵である島津のみならず、北東側（石田三成、後に江戸幕府）の脅威にも備えたものであったことが推測されよう。だとするならば、加藤時代の熊本は城下町全体としても、南北の防衛網を敷いていたはずである。しかし、寺院の要素のみでは、軍事上の工夫が多数仕組みられた城下町の防衛体制を論じるのには不十分である。そこ

で本稿では、熊本城下に多数見られる「勢屯」と呼ばれる軍事用の空地の配置状況を、寺院のそれと比較検討することにより、加藤時代の城下町の防衛体制を考察することとする。

## 5. 勢屯と寺院の配置から考える加藤期の防衛体制

「勢屯」とは、出撃の待機所的な役割を果たすべく、軍勢の屯集（とんしゅう）、勢ぞろいなどに使われる「広い場所」である。城下町での市内戦に備えた防衛上の配慮のひとつである。勢屯は「勢溜」と表記されることがある。また「武者溜」とも呼ばれ、全国の城郭・城下町に設けられていた。

勢屯の面積や形について特に規則性は見受けられないが、配置場所については、各地の城・城下町絵図から考察する限り、①通路型（城門前の空地、城郭の外延部通路、城下の辻などを拡張することで設置されたもの）、②内郭型（城郭の内郭部に広大な空地を確保したもの）、③屋内型（天守など屋内に設置）の3つの型に分類できる。紙幅の都合上、他都市の勢屯についての詳細は別稿に譲るが、このうち熊本の勢屯は①の通路型である。配置場所については、渡辺（1975）が、「市内の辻、城下町の入り口（構口〔筆者注〕）等各所に勢屯を見ることができる」<sup>18</sup>と指摘している。これらの点から、加藤氏時代の城下町絵図上で、辻、構口付近



図3 寛永六～八[1629～31]年頃の勢屯の配置（○印）<sup>19</sup>

で道幅を意図的に拡幅していると思われる場所を勢屯とみなし、その配置図を示したものが図3である。

加藤時代の城下町はその拡大整備の状況からみて、①古城（旧隈本城）期、②新城第1期、③新城第2期に分けられる<sup>20</sup>。

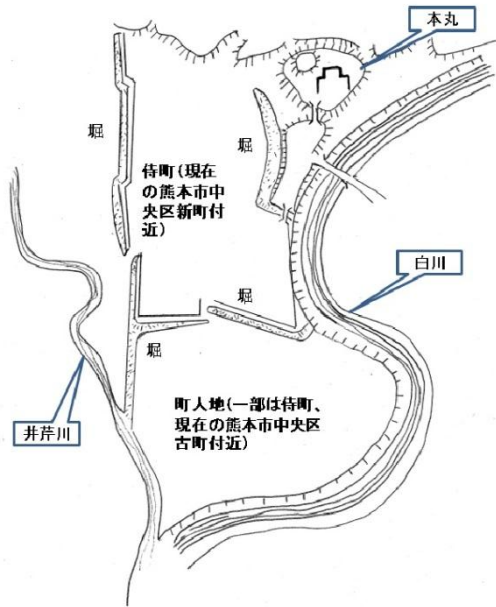


図4 古城期概念図<sup>21</sup>

城下町では通常、武士と町人の居住地が峻別されるが、南西部の勢屯の配置位置は、①の時期に古城および当時の武家屋敷地区であった新町の辻、構口付近に配置されているのが分かる。次に②の時期は、清正が肥後国全域を領有し、新城築城と城下町の拡大に着手した時期の前後だと考えられる。この時期、城下町は、新城城郭に加えて南東部の山崎、北東部の坪井、北部の京町に拡大した。さらに③の時期、城下町は東部の高田原、北東部の竹辺の地区に拡大した。この時期、勢屯は新城城郭付近に集中的に配置されているほか、京町、坪井の構口付近に配置されている。またその位置は何れも武家屋敷地区の近郊である。

これらの点から、熊本城下町の勢屯の大半は、①加藤支配時代前半までに、②城郭および構口付近の、③いずれも武士の居住地域に配置されていることが分かる。つまり、勢屯は城下町の中核部分の軍事上の要衝に、兵士の集合のしやすさも考慮して計画的に配置されているといえる。

次に勢屯と寺院の配置状況を比較してみる。まず既往研究は城下町における寺社の配置を、大きく次の四つに整理している<sup>22</sup>。①城下町縁辺の一方所に集合させて寺町をつくる、②城下の外辺に連続的に配列する、③城下町内部の枢

要な地点に分散的におく、④城下町通路の要所、出入り口（構口）に置く。このうち熊本は、会津若松、姫路とともに④に分類されている。

前述したように、加藤時代の熊本城下においては、南方の島津勢への備えであったとされる古町の一町一寺制はまだ成立していなかった。この時期の城下町全体における寺の配置を示したものが図5である。上述の分類どおり、寺は構口や堀沿いに配置されているのが分かる。同時に城下町の南西部と北西部それぞれに一定の防衛ラインを描くような形で配置されているともいえよう。



図5 一町一寺制成立以前（寛永六～八[1629～31]年頃）の寺の配置（▲印）

先述したように、勢屯の配置位置は、城郭内や構口等、軍事上の要衝と関連している。他方、この時代の町人地の位置を考慮すると、寺院の配置位置との関連が指摘できる。つまり、城郭内や構口付近に勢屯を配置し、これを北東部、南西部の両面からはさむ形で町人地に近いところに寺を配置する傾向が見て取れる。町人地は、武家屋敷地と比較すると、防衛面で脆弱になりがちである。この点を考慮すると、北東部の寺数は10であるのに対し、南西部に郭外にあるものも合わせて14寺配置されているのは、この地区に大規模な町人地（古町）が広がっていることと関係があるろう。いいかえれば、勢屯が軍事上の要衝を守り、勢屯による防衛網外部の軍事的脆弱性を補完するように、寺院が位置さ

れているのである。



図6 町人地の配置 (網掛け部分)



図7 勢屯 (○印)、寺 (▲印)、町人地 (網掛け部分) の三枚の図を重ねたもの

また時期的に見れば、勢屯は清正の時代からすでに、城下町の核となる部分を中心に配置されていた。寺院は、忠広の時代にわたって、勢屯による防衛網をさらに強化すべく、順次配置されたと考えられる。

## 6. おわりに

以上のように、勢屯と寺院の二つの要素に着目すると、加藤時代の城下町の防衛体制について、従来唱えられてきた島津対策とは異なる理念が見えてくる。加藤期の熊本城下は、清正、忠広の両代に渡って町全体に勢屯と寺院による二重の防衛網がしかれていた。さらにいえば、それは南西部のみならず北東部からの敵侵入に備えるものであった。城郭周辺を中心に集中的に配置された勢屯、それを補完する寺院は、加藤氏の城防衛に向けた強い意思の表れと看取できる。熊本は、城下町全体で城を守る防衛体制が敷かれていたのであり、まさしく“要塞都市”の名にふさわしい都市だったといえる。

このことは、現代熊本のまちづくりにとって、重要な示唆を与えてくれる。無論、熊本の魅力は熊本城だけではない。だからといって、他の構築物に目を向ければよいわけでもない。真に魅力的な都市を創出するには、まず城下町という都市形態に通底する基本的構造を理解することが欠かせない。すなわち城を核とした城下町全体をひとつの都市空間と捉え、その空間が辿った履歴を知ったうえで、時代にふさわしい城下町都市のアイデンティティーを新たに醸成していく、そのような姿勢が必要なのではないだろうか。都市の個性とは都市空間とそこで活動する人々によって育まれると考えるからである。

## 参考文献

### 【図書】

- 熊本県立第一高等学校編 (1984) 『隈本古城史』 熊本県立第一高等学校
- 建設事業イメージアップ熊本推進協議会編 (1998) 『肥後の土木史』 建設事業イメージアップ熊本推進協議会
- 新熊本市史編纂委員会 (1993) 『新熊本市史 別編 第1巻 絵図・地図 上 中世・近世』 熊本市
- 新熊本市史編纂委員会 (2001) 『新熊本市史 通史編 第3巻 近世I』 熊本市
- 佐藤滋 (1995) 『城下町の近代都市づくり』 鹿島出版会
- 内藤昌 (2001) 『日本 町の風景学』 草思社

藤岡通夫 (1976) 『熊本城』中央公論美術出版

榎文彦 (1980) 『見えがくれる都市：江戸から東京へ』鹿島出版会

吉田伸之他編 (2001) 『新体系日本史 6 都市社会史』山川出版社

### 【学術論文】

城戸久 (1943) 「熊本城宇土櫓造営年次私考」『建築學會論文集』No.30 : 13-18

小林清治 (1957) 「いわゆる「城下町」の構造」『福島大学学芸学部論集』 Vol.8 No.1 : 26-37

富田紘一 (1996) 「白川・坪井川流路と城下町の形成」『市史研究くまもと』No.7 : 1-20

宮上 茂隆 (1989) 「熊本城天守小天守および古天守の造営移築について」『学術講演梗概集』 : 657-658

渡辺達三 (1972) 「近世広場の諸形態」『造園雑誌』Vol. 35 No.3 : 1-7

### 【資料・報告等】

熊本市 (1989) 『歴史廻廊都市くまもとーフィールドミュージアム熊本城下町の提案ー』熊本市

13 大天守の築城時期についての諸説は、新熊本市史編纂委員会 (2001) 117 頁にまとめられている。

14 城戸 (1943) 17 頁、藤岡 (1976) 9-10 頁。

15 熊本市 (1989) 16 頁。

16 小野/北野 (2004) 160 頁。

17 同上。

18 渡辺 (1972) 6 頁。

19 図 3、5~7 の原図は新熊本市史編纂委員会 (1993) 20 頁。

20 熊本市 (1989) 4-5 頁、富田 (1996) 18-20 頁の記述を参考に筆者が時期区分した。

21 原図は富田 (1996) 20 頁。

22 榎 (1980) 127 頁。

1 近世当時、「城下町」の用語は使用されなかった〔小林清治 (1957) 26 頁〕。町全体をさす場合は、熊本では「熊本曲輪 (郭)」と呼ばれた〔熊本県立第一高等学校編 (1984)、346 頁〕。本稿では、便宜上「城下町」を使用する。

2 内藤 (2001) 52 頁。

3 吉田 (2001) 54 頁。

4 内藤 (2001) 50 頁。

5 同上。

6 以下、佐藤 (1995) 103 頁以下に拠る。

7 吉田 (2001) 90 頁。吉田は、「都市のアイデア (=理念)」とは、「都市を建設するヘゲモニー主体、すなわち都市の所有・領有・支配主体における造形思想、あるいは「社会=空間」理念・構想・戦略・計画」であると述べている。この意味において、防衛体制は要塞を本質とする城下町のアイデアを構成する要素のひとつとして位置づけられよう。

8 町民の信仰と集会の中心にするため、町人の相互監視システムとするため等、諸説あるが、ここでは軍事的上理由を採用しておく。

9 例えば、建設事業イメージアップ熊本推進協議会 (1998) 2 頁。

10 原図は新熊本市史編纂委員会 (1993) 30 頁。

11 原図は新熊本市史編纂委員会 (1993) 20 頁。

12 宮下 (1989) 658 頁。